

ゆきぎのみち

日本古神
道研究会

かすがちよくしさい 春日勅使祭に寄せて

神社には一年の中にくつもの祭典がありますが、その中に、「勅使参向」がある式典は神社の中でも一番格式をもった祭になります。「勅使」というお言葉からは、何だかとても遠い世界のことのような印象をお受けになられるでしょうか？

「勅使」とは、天皇様の思召しにより、その名代としてその神社に来られる方のことです。有名な勅使祭として、春日祭、石清水八幡祭、葵祭（三大勅使祭）などがあります。今回、三月十三日の春日祭に出席をさせて頂きました。

おごそかに式典が進む中、表面は勅使と春日大社の宮司をはじめめとする神主との間の行事のように見えるけれども、これは正に神の世界での神様同士の行事としての意味があるのだと気付かせて頂いたのです。

神様が一番最初に言っておられたのは、「天皇の名代としての勅使は、単なる役職としての勅使ではなく、天皇の意向を伝えるは勿論、天皇も単なる一個人としての天皇ではなく、歴代の天皇の意向はもとより、古の邇々岐命（神）とし

ての伝えをなす役目ぞ。また、春日の御社に仕える神主達も、単なる儀式としての行事ではなく、誠、届けた先の天児屋根神をはじめとする春日の神に対しての行事として行なうことぞ」という事でございました。

そして、「天皇様の意向を」と言うのと、今の明仁天皇様のことを見て、人としての思いでよく何かの式典の時に言われる「何かのことを皆がよかれと望みます」という独特の仰り方をされますけれども、そういったお言葉を伝えるに行っている様に皆様は思っておられるかも知れませんが「そうではない」ということでした。

天皇様のお役目であるとか、神様が見ておられる天皇様のお立場というものは、そういったものは根本的に違っていて、実際に現人神様としてのお役目をなさられるお立場・お役目であり、そのことの名代としてのお役目をするために、実際に神社に勅使を派遣されるのだということでした。

今回の春日祭では、「天孫降臨」の時の五伴男の神様のお一方であられる天児屋根神様に、邇々岐命（神）様から

「日本と韓国が一つに和し、世界への輪を広げよ。
そのことの意向は如何に」
というお伝えが出されました。

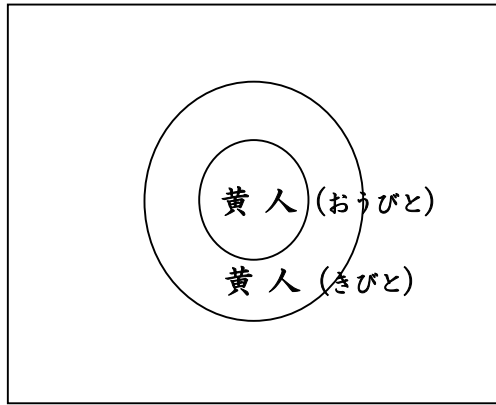
世界は五色人からなり、オリンピックの五輪のマークや神楽鈴のひれにも表されます。それぞれの民族には、それぞれのお役目があります。それは、日本の国旗、日の丸にこめ入れて頂いてい

るのです。

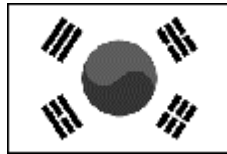
日の丸は「赤」で、「白地に赤く」となりますが、本来はここは黄金の色を意味します。そして、天からの意、天の御柱みはしらがおりられる所をあらわし、それは黄人の役目なのです。黄人は日本人と中国・韓国・東南アジアの人々のことです。

黄色人という、外国からイエローモンキーなどと陰口を叩かれ、あまり良い印象がない方もおられますが、根本的に考え方を

赤人（あかひと） 白人（しろひと）



五色人の図



青人（あおひと） 玄人（くろひと）

切り替えていただく必要があります。

そして、黄人おうびとには、黄人きびとと黄人おうびとに分かれ、日本人は黄人おうびとになり、中国・韓国・東南アジアの方々が黄人きびとになります。

日本・韓国それぞれの国旗を見ても、そのことを現わしているではありませんか。（周囲の四つに伝え為すは韓国の役？）

かつて、太平洋戦争の時には、大東亜共栄圏を旗印に、戦さを進め、今もって侵略の歴史と世界から非難されているために、日本人でもすんなり受け入れにくい方々も多いかと思いますが、民族としての神様がお与えになられた根本的な使命であります。

むしろ、黄人としての使命を忘れ餓鬼・修羅・畜生の世界に走っている日本の姿にこそ問題があるのです。

今回の通々岐命（神）様のお言葉である

「日本と韓国が一つに和し、世界への輪を広げよ。そのことの意向は如何に」

ということを言われたのも、単なる今の国家間の事として、小泉首相と金大統領が親善として仲良くせよと言われたのではなく

「中心である黄人・黄人が一つになり行うことがある
神の意、遍く伝えなせ

今の地球は、過去のしがらみにとらわれ
争い、憎しみを出しているゆとりなど無い
地球全体のことをよく考えよ

争い・憎しみからは神の恵みは入らぬ
地球がなくなつてからとやこう申しても遅いのだぞ」

と。その時、それに対しての天児屋根神様のお言葉は、人の意としてのごことが

今は中心にめぐり過ぎておりますが

今の世は神界、仏界としての心根よりほど遠く

国全体が、餓鬼・修羅の渦巻く世界となり

神の意、伝わりにくきもの大なり

過去の悲しい歴史ということを言う前に

古の神の歴史ひもとかせ

日の丸の中心としての役目もちしこと甦らせよ

(九州幣立神宮の阿蘇遥拝所、又は、触神社等)

より基となることにて

両国がつながり新たなめぐりなせ

過去の歴史の中には天皇の歴史もあれば、神皇、

さらには神としての世界がある

人が人の世界のみを見

互いに争う姿より産み出されるものは

自らをも滅ぼす毒素なり

(それは病める地球に鞭打つに等しく

地球の命にも関わりあり)

相手を責める姿は神の支えのなきところ

国東ねる者はいずこへ国を導こうといたしておるのじゃ

餓鬼・修羅の世界に導くも、神仏の世界に導くも
指導者たる者の責なり

そして、その言葉伝えるは神主の使命なり

さらには、「蹴鞠」なるもの

現代はサッカーなどと申しているもの

和する祭典(ワールドカップのこと)に

フリーガンなる修羅の者人の世界で争うに非ず

ト・ホコの教えにある如く

和して聞かぬ時は断固制圧いたされよ

武の神、鹿島・香取に参りなせ

その任にあたられる方(その担当の方々)は

数々の(武器などの)品を揃える前に

心を合わせ、(神と合一なされよ)

武の神の社に参り、神に御霊を合わせおけ

暴れ・乱れる者共は

現世の業よりも

それをあやつる・動かす所をば

打ち砕きなし、平らげよ

日本の謝罪は、外つ国の人に対してする前に

まず神に対して行なえ

久しく国民としての役目も行なわなければ

縦としての使命も忘れておるであろう